近代文学ノート

I

勝本清一郎

みすず書房

勝本清一郎

近代文学ノート

1

解説　山田博光

みすず書房

勝本清一郎

近代文学ノート 1

〔全4冊〕

山田博光解説

1979年7月 1 日　印刷
1979年7月10日　発行

発行者 北野民夫
発行所 株式会社 みすず書房 〒113 東京都文京区本郷3丁目17-15
電話 814-0131(営業) 815-9181(本社) 振替 東京0-195132
本文印刷所 三陽社
扉・カバー印刷所 栗田印刷
製本所 鈴木製本所

©1979 Misuzu Shobo
Printed in Japan
書籍コード 1391-10721-8005
落丁・乱丁本はお取替えいたします

目　次

I

表現主義……5
透谷の文学的立場……10
若き藤村の愛蔵書……17
近代日本文学の把握……31
智慧と情熱……45
晶子の「みだれ髪」……57
ひだり縦書き……69
島崎美術館の話……73
水上瀧太郎書目……75
谷崎潤一郎と志賀直哉……109
トルストイ夫妻の相剋……128
トルストイからの再出発……138

花袋訳「コサアク兵」……148
内田百閒の「凸凹道」……149
島崎藤村論……152
芸術的結社の現代的本質……171
秋聲氏との文学・生活談……182
あとがき……190

II

絵巻物形式と随筆的心境の文学……195
——水上瀧太郎氏の「大阪の宿」を繞って——
正宗白鳥論……235
徳冨蘆花論……273
——文壇的遺産の再批判——
片山潜との会見……309
藤村の憶い出……321
解説　山田博光

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

I

表現主義

第一次世界大戦中からその戦後へかけてドイツには幾多の文学運動や流派があらわれたが、それらの基底を貫くものは表現主義の思潮であった。この痛烈な思潮は、一般の日本人が考えたほど簡単に颱風一過してしまったものではない。私がドイツにいた 1929 年から 1933 年へかけての頃でも、Der Querschnitt（横断面）とか、Neue Revue（新レヴュウ）とかいった種類の、当時割に流行した近代主義的文芸雑誌の新刊号を見ると、その紙面のいたる所にまだまだ表現主義は、すくなくともきれぎれな姿で、蔓延っていた。ノイエ・ザハリッヒカイトへ、郷土的・宗教的ロマン主義へ、プロレタリア文学へ、デカダンスへ、ナチス文学へ、と表現主義の分裂や転形は進行していた。しかし尚すべての間に、それが本来のドイツ風の主観的な芸術の特色であるかのように、それは存在していた。日本にはただそれらが当時すでに紹介されなくなっただけの話である。日本のドイツ文学者はカロッサやリルケやヘッセへ後退してしまっていた。ドイツの現実には、なお表現主義を消滅させないだけの社

会的・歴史的ミゼーレ（悲惨）が厳存していた。ドイツは当時も敗戦国であった。街上には失業者があふれ、頽廃が支配階級の生活を蝕んでいた。ドイツの現代的汚辱の社会に這入り込んで見て、表現主義の存在理由は外国人の身にも沁みた。逆にいえば、表現主義をみつめることを避けては、ドイツ人の現代的な生きかたの底にあるものを、本当に感じ取ることは出来ないのであった。

しかし私は当時すでに表現主義を尊敬はしていなかった。時にはその病毒にしばしば嫌悪さえ覚えた。無論その嫌悪は、表現主義者がその作品の題材として、各種の現代的ミゼーレを剔抉していることに対してではない。そんな点でなら、プロレタリア文学の方にもっと酷烈なものがあった。表現主義文学の場合にはミゼーレな対象を取扱っているばかりではなく、そのミゼーレな事象や精神現象を把えている作家の精神までがまたミゼーレなのであった。ここに我々と表現主義作家との間の一線があった。この一線の彼方にある冷いものが我々には遣り切れなくもあり、また時には莫迦々々しくもあった。表現主義文学の主体の深刻ぶった偽悪者的ポーズの底の浅さが見透かされる場合も多かった。不良少年や淫売婦の精神のミゼーレに対決した場合のようなものである。それだけにまた、ミゼーレな作家精神の側には側で、それなりの不貞腐れたうぬぼれの牢固たるものもあった。破産し切ろうとしている作家精神からいえば、共産主義者やその他の政治的革命主義者の作家精神のようなものは、理想を捨て切れぬ、健康過ぎた甘いものだったに相違ない。すべての体系的・建設的世界観は、救いがあり過ぎることによって冷嘲された訳である。

私は今度の戦時中に、山の上の硫黄の温泉場の近くに疎開した。そこで皮膚病患者にしばしば面接

する機会を持った。或る種の皮膚病患者に対しては、私は普通の病人に対するのとは違って、率直に嫌悪を感じた。私は嫌悪を感じながら、彼等のうちの或るものの捨て鉢な精神に面と向った。そして私は曾てドイツで表現主義芸術にしばしば面と向った時のことを憶い起した。

ところで私は今度の戦後の日本文学にもまた、そうした表現主義の断片を随所に見出している。特に小ブルジョワ的立場の、またその中でもいわゆる三十歳代のジェネレーションの文学者たちの作品や言説においてである。戦争最中には戦争への順応者を一番に出し、しかもみずからの精神を傷けることも最も深かった層がそれであった。勿論、いま誰も表現主義などを唱えてはいないし、また自分をそうだと内省もしていないであろう。しかし彼等の個人主義や心理主義やドストエフスキイ主義といったものが、あきらかにそうなのである。殊にドストエフスキイは、かつてのドイツの表現主義運動に対して一つの源流のような役割を果したが、今の日本の戦後文学にも同様の位置を占めている。傷ついた精神や歪んだ人間性を対象にしつつ、作家自身もまた傷ついた精神や歪んだ人間性の泥沼の中にあって、こねかえしている以上、日本の戦後文学の多くのものはやはり表現主義文学の一種なのである。野間宏とか椎名麟三とか、いわゆる比較的真面目な新しい作家たちほど、この思潮の中にいる。彼等の表現主義を裏付けている日本の社会のミゼーレも、またその投影としての日本人の現代精神のミゼーレも、戦時から戦後へかけてこの日本に無慈悲に厳存する。私は終戦後、グロスの画集「此の人を見よ」を久しぶりで開けて見た。其処に描かれてあるような混乱したミゼーレが、今の日本の歴史的段階にもまた存する。又それを描いたグロスのような精神のミゼーレが、今の日本作家の

精神にも同じく存する。無論現在の日本革命は、曾ての流血のドイツ革命とは進行の様相と速度を異にしている。それだけに日本の表現主義も露骨ではなく、夾雑物で緩和されている。しかし本質的なものはやはり存する。曾ての同志間の友情には鰯が這入って仕舞っている。作家たちにとって、彼等自身の戦時中のさまざまな行動の記憶はまだなまなましい。健康者が不健康者から冷嘲されている。ミゼーレはやはり深刻である。

この作家精神の現象に対して、号令のように単純に割り切れた評論は、むしろ的はずれに終るであろう。自分だけ健康だといった顔をした評論も、むしろ滑稽であろう。しかし私は私なりに、少し身を入れて、今の日本文学の表現主義的現象をみつめている積りである。ただ、少し長い眼で人間の社会生活を見ることが、今の表現主義的作家たちにも必要だろうとは考えている。戦時中に、戦争があたかも永遠に続くかの如くに思い過して錯乱した文学者たちがあった。しかし少し長い眼で見れば、戦争が人類の全生活史の中で占めた期間は、そう長くなかった。平和の期間の方がいつも長かったことが事実なのである。それと同じように現在の日本人の社会生活にとって、いわゆる戦後の時代・インフレの時代がそう長かるべきものでないことも、理性的にはきわめて明瞭に確乎と考えられるのである。病人でない者までが一時たりとも病人をきどって譫言をいう必要はない。あまりに眼前の事象にばかり没入して、遠大な歴史観を取り落してしまうことは愚である。落ちついた反省が必要であろう。

またミゼーレな作家精神の破壊力は、振り向けように依っては、今の日本では、半封建的文学へ向

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

っての爆薬となる。ドストエフスキイ主義でもジード主義でもプルースト主義でも表現主義でも、それらが現代日本文学の半封建的段階を克服するものとして作用するなら、日本において近代文学確立のための務めを果すことになる。ただ現状ではそれがそうは振り向けられては居らず、むしろ味方といって好い側へのみその破壊力のとばッちりが及んでいるのである。「新日本文学」と「近代文学」との論争などがそれを語る。この関係は是正されなければならぬ。近代文学の一翼としての表現主義的精神は、現在の日本において第一義的には先ず何者に対立すべきか――この点が不明瞭どころか、反対の方向を向いていてはおかしい。

（1948年二月十四日稿、同年六月「三田文学」第廿二巻第五号所載）

透谷の文学的立場

戦時の日本は、よき文化人にとっていいようのない被害の年であった。被害は故人の文学者の上にさえ及んだ。北村透谷はその一人であった。

透谷の像はゆがめられ、その醜悪化されたものがかえって神聖な像として、戦争協力の神がかり的な精神主義・ローマン主義に悪用された。透谷の真実の立場にとって、これほどひどい侵害と汚辱はないであろう。舟橋聖一の小説「北村透谷」などがそういう役割を演じた。しかもその作たるや、不勉強きわまる間違いだらけの知識の上に、ほしいままにでッち上げられたものであった。透谷会なるものを作った中河与一は透谷の名で富豪に寄附をさせ、次には透谷賞という名でその金を自分のふところに入れた。透谷の精神とはおよそ正反対の精神の男に、透谷の名が盗用されたのである。

戦時日本の詭弁家どもが、透谷をおあつらい向きの高貴な精神主義者に仕立てあげようとする場合、いつもきまって引用するのは、彼の「人生に相渉るとは何の謂ぞ」という一文であった。これは1893

年一月十三日「国民之友」第一七八号に載った山路愛山の「頼襄を論ず」を駁して、同年二月廿八日発行「文学界」第二号に透谷の書いたもので、島崎藤村の「春」第六十一章にも一部分の引用があって、世に知られている。しかし藤村はこの論文を、山路愛山と透谷、「国民之友」一派と「文学界」一派、の立場の差違を重大視する目的の箇所に引用したのではない。「文学界」創刊当時の活気に満ちていた頃の透谷のおもかげと、病みつかれて肉体的にも精神的にも参りかけていた時の透谷の姿とを対照的に描き出すのに役立てたのであった。が、その後の多くの引用者たちは、愛山たちの実利思想に対して透谷がそれとまさに正反対な非実利主義、精神主義、ローマン主義、芸術至上主義を宣明したものとして、専らこれを利用したのである。かくして透谷の文学的立場の根本がそういう非社会的なところにあるかの様な誤解が、ひろく社会に通用させられてしまった。

しかし透谷のこの一文の範囲だけに於ても、透谷が人生に相渉らない文学、人生のためでない文学を説いたのでないことは、あきらかである。この論文の結語「嗚呼文士、何すれぞ局促として人生に相渉るを之れ求めむ」を、全文の中心思想から切り離して、芸術のための芸術主義の主張に解釈することは、文章の読みかたのイロハも知らないものと嘲わざるを得ない。透谷の意は、眼前の実利的効果だけを文学への期待の主眼にする態度を警めたものに過ぎない。文学を事業だとしている点でも、また人生に相渉る文学を求めている点でも、愛山と透谷は同一陣営に属していたのであって、同年四月八日「評論」第一号所載「明治文学管見の一、快楽と実用」では透谷はみずから一層明瞭に、「文学が人生に渉るものなることは何人と雖も（原文、いへ雖）之を疑はぬなるべし」とも、「文学が人生

に相渉るものなることは余も是を信ずるなり」ともことわっている。

ただ透谷は愛山のように外面的な意味でなく、一層深化した意味でその相渉関係を明確にしたのである。かつてプロレタリア文学の陣営に於て、文学がプロレタリアートの刻々の政治運動に直接的、即効的に役立つことを重しとする見解と、否、政治と文学との関係はもっと深いところで、プロレタリアートの精神生活の基盤を築く部署に於て、とする見解とが対立したことがあった。愛山と透谷の見解の差はつまり後年のこの両者の見解の差にあたるもので、いずれの場合でも一つ思想運動の両側面を代表する関係にある。特に愛山の立場を単に俗人呼ばわりで片づけるのは浅見で、日本資本主義の向上期のキリスト教的思想家のあいだに於ける社会思想の萌芽を、われわれはそこに見出さなければならない。

第一この「俗人」愛山と透谷とは非常な親友で、キリスト教的思想家同士としての二人の交渉は「文学界」同人たちと透谷との文学的友人間の交渉より一層茂くさえあった。透谷の文学史的構想に影響を与えたものは「文学界」同人たちではなくて、近代日本に於ける市民的歴史家の一人山路愛山であった。1892 年十一月三日透谷は、麻布区簞笥町四番地の崖上に居を卜した。間もなく翌年一月、愛山は赤坂区仲之町二番地に引越して来て、二人はほんの一足で往来出来る関係になった。翌月愛山は更に麻布区霞町二十一番地へ移転した。すると今度は透谷が、やはり間もなく、同町二十二番地へ跡を追うようにして引越して行った。今度は一層近く、斜め向う前に居住する間柄となった。透谷が麻布簞笥町の家を一箇月もたたない内に引越したという伝説は、愛山が仲之町から引越した場合と混

線したのではないかと私は考えている。そういう混線が起り得るほど、その頃二人は親しく、殆ど毎日のように相往来していたといってよい。透谷の「人生に相渉るとは何の謂ぞ」は恰度その時期の両者の談論風発を反映したもので、決して敵対陣営間の応酬ではない。味方同士の間の応酬であった。透谷の歿後、追悼記「北村透谷君」の中で愛山自身もこの事情にふれている。

「余は文壇に於て最も多く君に攻撃せられたり、私交に於て最も多く君に親しまれたり、君が痛酷なる論文を『文学界』に掲げて余を駁撃したるより数日を隔てゝ君は余が家の薯汁飯を喫せり。」（国民新聞一三〇一号、1894年五月廿二日。「明治文学研究」誌上の転載に1892年五月二十七日とあるのは誤。）

なお多少うがったことをいえば、透谷が愛山を相手にえらんだのは、実は敵は本能寺にありで、「国民之友」の主幹徳富蘇峰、「女学雑誌」の主幹巌本善治（よしはる）を内実の目標にしていた関係がある。この二人が後年、それぞれ従来のおのれの立場を裏切ったことは世に知れている。透谷の鋭敏な神経が、二人の上に早くもそういう人柄を感じていたことは、あり得たことであろう。後に透谷のミナ夫人宛書簡の自筆原本の中に「女学子の任の如きは表面にあり……彼れ女子を喜ばすの説をなす」とあるのなどは、巌本善治の立場をよく見すかしている透谷の言である。

しかし「文学界」創刊当時の透谷の立場としては蘇峰、善治を直接攻撃する訳には行かなかったので、そこで身替りに親友愛山を連れきたって、あとでは両人でとろろ飯を食べながら大笑して済ませたという次第だったのであろう。また当時「文学界」は「女学雑誌文学界」と肩書をつけていた時で透谷はこの「女学雑誌」云々の肩書を、すなわち巌本善治の支配力を「文学界」から排しようとした

人々の側に立っていた事情もあった。

では透谷の文学的立場に基本的に対立した真実の相手は誰であったかといえば、それは紅葉、露伴を主軸とした元禄復興派の文学であった。なかんずく硯友社文学であった。透谷は愛山との論争より一年前、「女学雑誌」に於ける批評欄担当の門出にあたって、日記に次のように記している。

（1892 年三月）「八日、女学雑誌社に到り巌本氏に会ふ。担当することとなりたる批評の第一を置て来りたり。元禄文学攻撃の第一着手即ち之なり」

この三日前に発行した「女学雑誌」第三百七号には、次のような予告があった。

「次号には……透谷隠士が以後担当することとなりたる、小説書類の批評を掲載すべし」

かく「女学雑誌」からも期待された透谷の活動の第一着手が、元禄復興文学派の批判にあったことは重要である。この時の原稿は十二日の「女学雑誌」第三百八号に載った「伽羅枕及び新葉末集」の第一回分がそれであった。この続稿はつづいて同月十九日の第三百九号に掲げられた。但しこの部分は今日まで五十六年間、まだどの単行書にも再録された事がないので、世人は従来、半かけのままの資料で透谷の紅葉・露伴批判を見て来たのである。

すなわち 1894 年版「透谷集」、1902 年版「共編透谷全集」、1922 年版「改編透谷全集」、1927 年版「現代日本文学全集北村透谷集」、1927 年版「岩波文庫北村透谷集」等、みなこの論文の下半部を脱落しているのである。この脱落部分の中で透谷が紅葉の「伽羅枕」に対して、「色を売る歴史のみにして、恋を談ずる者にあらず」と喝破し、そこに封建時代の好色はあっても近代社会の人間的な恋

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com